

島根県立石見美術館

研究紀要

第十八号

18


島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

Bulletin of
Iwami Art Museum
No. 18, 2024

島根県立石見美術館
研究紀要
第十八号

18

Bulletin of
Iwami Art Museum
No.18, 2024

島根県立石見美術館研究紀要
第18号

発行 令和6年3月29日

編集・発行
島根県立石見美術館
〒698-0022 島根県益田市有明町5-15
電話 0856-31-1860 (代表)
E-mail zaidan@cul-shimane.jp
<https://www.grandtoit.jp/museum/>

デザイン
野村勝久 (野村デザイン制作室)

印刷
柏村印刷株式会社

©Iwami Art Museum, 2024

目次

〔調査報告〕 津和野藩御殿内の障壁画について――岡野洞山陳蓋筆・山本葉谷筆の杉戸絵を中心に――	角野広海
鼎談「建築で街は変わった？」 内藤廣×洪昌督×川西由里	

津和野藩御殿内の障壁画について

—岡野洞山陳盖筆・山本栞谷筆の杉戸絵を中心に—

角野広海

はじめに

津和野藩御殿は、嘉永六年（一八五三）に津和野城下での大規模な火災により焼失し、安政三年（一八五六）に再建された。その再建に際し、御殿内の障壁画の多くを描いたのが、津和野藩御用絵師・岡野洞山陳盖（？一八六〇）と津和野藩出身の文人画家・山本栞谷（一八一〇～一八七三）であった¹⁾。明治四年（一八七二）には廃藩置県に伴い津和野藩が旧浜田県へ編入され、藩の御殿も解体されたが、御殿の建具は浜田へ移送され旧浜田県庁として再利用されたという²⁾。現在では、御殿を飾っていた障壁画のほとんどが所在不明となっている。

これまでも津和野藩御殿内の障壁画の所在を確認する作業は進められてきた。しかし実際に調査を進めると、御殿内のものだけでなく旧家に伝わったもの、後世に個人が蒐集したもの、津和野藩とは無関係のものなど多種多様なものが見出されるため、それらの時代・作者・伝来などを整理していく必要がある³⁾。

よって本稿では、まず津和野藩御殿内の障壁画に焦点を絞るため、御殿内の間取りと障壁画の作者・画題・形状材質を示している栗本格齋《亀井家表御殿の全絵図》（津和野町郷土館蔵、以下では御殿絵図と呼ぶ）の概要を確認する。その上で、御殿絵図の記載と合致する作品の概要を確認し、それらが津和野藩御殿内の障壁画であったことを示したい。

なお、亀井温故館（島根県津和野町内）に御殿絵図の原図が所蔵されているとの報告がなされたことがあるが⁴⁾、同館が休館中により調査が叶わなかったため、本稿では原図については言及しない。

一 御殿絵図の概要

御殿絵図は縦三二五・三 cm × 横一七七・七 cm の巨大な掛軸であり、津和野藩主亀井家の御教寄屋番を務めた栗本格齋（一八四五～一九二六）が大正三年（一九一四）に描いたものである。右上方には格齋自身による序

文があり、「大奥御殿」と「若殿御殿」については略すという注意書きのほか、制作方法として部屋ごとの「裂れ図」を基にしたことや御殿の歴史などについて記されている^⑤。

画面の大半には間取りが色分けで示されており、緑色は御居間、橙色は御廊下、黒色は溜まりの間、白は御床・押し入れ・廁とされている。各部屋には部屋の名称、障壁画の作者・画題・形状材質、部屋で行われていた行事などについて墨書されている。

それら記載の内、障壁画に関するものを整理すれば、表1の通りとなる。それらの多くは山本栞谷筆とされているが、玄関口に近い客人向けの部屋は岡野洞山陳蓋が担当しており、藩内での絵師の序列を示しているように興味深い。また、袋戸に桜間青厓(一七七六～一八三八)、椿椿山(一八〇一～一五四)、福田半香(一八〇四～一八四四)筆のものが含まれているのは、亀井家・多胡逸齋(一八〇二～一八五七、津和野藩家老)・山本栞谷が、渡辺華山(一七九三～一八四一)周辺の画家たちと深い交友関係にあったためであろう^⑥。杉戸の内、一点のみ「山本見山」という作者も記されているが(表1のNo.30)、詳細不明である。

以下では、所在が確認された障壁画(表1のNo.3・11・13・17・36・41・43)について、各作品の概要を確認したい。

二 岡野洞山陳蓋《麝香猫図／野馬図》の概要

御殿絵図には、「番頭休息所」の箇所に「杉戸 麝香猫図 岡野洞山陳

益筆」、「御渡り廊下」の箇所に「杉戸野馬図 岡野洞山陳蓋」と表裏の関係で記されている(図1)。この記載に合致する杉戸絵は、津和野町教育委員会と津和野町立津和野中学校に所蔵されている(図2)。

本作は杉戸着色の二枚、法量は各縦一七〇・九cm×横一三九・二cm

(外寸は各縦一七八・四cm×横一四六・七cm×厚さ三・五cm)。現在は津和野町教育委員会と津和野町立津和野中学校に一枚ずつ分蔵されている。片面には三匹の麝香猫と太湖石のそばに咲く百合の花が描かれ、もう片面には柳の下に三頭の暴れ馬(白毛、駁毛、青毛)が描かれている。様式的には狩野派の特徴が随所にみられるため、作者は御殿絵図の記載の通り岡野洞山陳蓋と考えて良いであろう。引手は《野馬図》の面のみにみられ、亀井家の家紋「隅立四つ目結紋」があしらわれている(図3)。

津和野中学校所蔵の一枚には、《麝香猫図》の下端に古いラベルが貼られており、「島根県立津和野高等学校 類5 番号73 所在事務」とある^⑦。旧島根県立津和野高等学校は現在の島根県立津和野高等学校の前身にあたり、大正十一年(一九二二)から昭和二十三年(一九四八)まで使用されていた名称である^⑧。よって、少なくとも津和野中学校所蔵の一枚は、その時期に同女学校の所蔵だったことがわかる。なお、現在の津和野中学校は、学制改革により昭和二十二年に開設された建物である。

一方、津和野町教育委員会所蔵の一枚は、元々は旧津和野町民俗資料

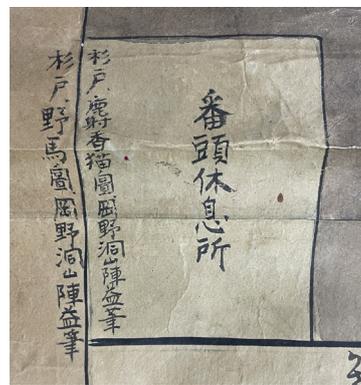


図1 | 栗本格齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分) 津和野町郷土館蔵

表1 | 御殿絵図に記載された障壁画一覧

※「□」は未判読文字、「/」は杉戸絵と衝立の表裏の関係を表す。 ※画題の呼び名は原文を現在の通称に改めた。

※御殿絵図で作者が未記載の箇所は、本表でも空欄とした。 ※現在の所在が確認された作品は、右端の欄に○と記した。

No.	作者	画題	形状・材質	部屋	所在
1	岡野洞山陳盖	松鳩	杉戸	御廊下(御玄関・式台の次)	
2	岡野洞山陳盖	養由基射雁/騎虎鍾馗	杉戸	御廊下(御広間の横)/溜りの間	
3	岡野洞山陳盖	麝香猫/野馬	杉戸	番頭休息所/御渡り廊下	○
4	山本栗谷	瀧(両面とも)	衝立	御廊下	
5	山本栗谷	児嶋高德	杉戸	御用席御廊下	
6	山本栗谷	後醍醐天皇・名和長年・楠正成・ 楠正行・新田義貞・菊池武光・□□□□	杉戸	御用席	
7	山本栗谷	荘子夢蝶図	杉戸	御廊下	
8	山本栗谷	波/杜若	杉戸	御廊下/御居間書院四の間	
9	山本栗谷	伯牙絶弦	杉戸	御廊下	
10	山本栗谷	蟹・亀	屏風・2曲1隻	御廊下	
11	山本栗谷	鶴/柳鷺	杉戸	御居間書院/御居間書院四の間	○
12	山本栗谷	司馬温公薨割/商山四皓圍棋	杉戸	御居間書院四の間/御居間書院四の間廊下	
13		鯉魚	杉戸	御居間書院四の間廊下	○
14		桐/鶴図	杉戸	御居間書院四の間廊下/御廊下	
15	山本栗谷	鶏	衝立	御居間書院四の間廊下	
16	山本栗谷	鸚鵡捉魚/蝦蟇鉄拐	杉戸	御廊下/御時計の間	
17		狗児/薄に兎	杉戸	御廊下	○
18	山本栗谷	黄石公張良	杉戸	御廊下	
19		西湖	襖	御時計の間	
20	山本栗谷	郭公儀/東方朔奪桃	杉戸	御廊下	
21	山本栗谷	五老人/雲龍	衝立	御居間書院/廊下	
22	岡野洞山陳盖	竹雀	杉戸	御廊下	
23	山本栗谷	蘇武持節/伯夷叔齊採薇	杉戸	御廊下	
24	山本栗谷	太公望垂釣/漢高祖斬白蛇	杉戸	御廊下	
25	福田半香	山	袋戸(上)	御小書院窓の間(違い棚床)	
26	椿椿山	鷺鳥	袋戸(下)	御小書院窓の間(違い棚床)	
27	山本栗谷	梅花金鶏	杉戸	御廊下	
28	山本栗谷	果物	袋戸・金地(上)	御居間書院(違い棚床)	
29	山本栗谷	鳳凰	袋戸・金地(下)	御居間書院(違い棚床)	
30	山本見山	竹虎	杉戸	御廊下	
31	山本栗谷	寿老人亀	杉戸	御廊下	
32	山本栗谷	老子騎牛/黄初平起石	杉戸	御廊下	
33	山本栗谷	子路負米	杉戸	御廊下	
34	山本栗谷	韓退之	杉戸	御廊下	
35	山本栗谷	予讓刺衣	杉戸	御廊下	
36	山本栗谷	王羲之	杉戸	御鈴	○
37	山本栗谷	鶏/象	衝立	御廊下	
38	山本栗谷	鶏	袋戸	御新座敷	
39	山本栗谷	山水	屏風・2曲1隻	御廊下	
40	山本栗谷	人物	額	御廊下	
41	山本栗谷	詩経	襖	御居間一の間	○
42	桜間青厓	鷺	袋戸	御居間一の間(御袋床)	
43		騎馬狩獵	襖	御居間二の間	○
44	山本栗谷	西湖十景	額	御居間二の間	
45	山本栗谷	富士山(両面とも)	衝立	御廊下	
46	山本栗谷	群蝶/群蜻蛉	衝立	御廊下	
47	山本栗谷	梅雀	小襖	御茶処	
48		唐草	襖	御書齋一の間	

2-2



2-1



2-4



2-3



图3 | 同(部分)

图2 | 岡野洞山陳盖《麝香猫図／野馬図》

2-1・2-4：津和野町教育委員会蔵(津和野町民俗資料館旧蔵) 2-2・2-3：津和野町立津和野中学校蔵

館（一九七二年開館、二〇一六年閉館）に所蔵されていたことが知られている。同民俗資料館は津和野藩校・養老館の建物の内、剣術道場を修理復元した施設である。

三 山本栞谷《鶴図／柳鷺図》の概要

御殿絵図には、「御居間書院」の箇所に「杉戸 山本琴谷筆 鶴ノ図」、「御居間書院四の間」の箇所に「杉戸 此方ハ柳ニ鷺」と表裏の関係で記されている（図4の上方）。この記載に合致する杉戸絵は、浜田市教育委員会、島根県立津和野高等学校、島根県立古代出雲歴史博物館蔵に所蔵されている（以下では浜田市教委本、津和野高校本、出雲歴史博本と呼ぶ）。これまでこの三枚は一組の杉戸絵と見なされていなかったが、本来は四枚一組だった内の三枚だと考えられる。本稿では、まず一枚ずつ概要を確認した上で三枚の共通点を指摘し、いずれも津和野藩御殿を飾っていた一組の杉戸絵であったことを示したい。

三―一 浜田市教委本の概要

浜田市教委本（図5）は杉戸着色の一枚、法量は縦一六六・五cm×横一二七・五cm（外寸は縦一八〇・〇cm×横一四三・〇cm×厚さ三・五cm）。片面には二羽の親鶴が頭を下げて一羽の子鶴が羽を広げる様子、もう片面には雪景色の中で柳に向かって羽ばたく白鷺が描かれている。引手は両面ともに宝剣に双龍紋（図6）である。

《鶴図》の面の下端には、一番初めに「第」、最後に「號」と書かれた縦長のラベルと、「新庁舎持込」と書かれたラベルが貼られている。後述するが（十四頁）、前者のラベルは同じく浜田市教育委員会所蔵の《鯉図／藤花図》（図18）の杉戸絵にも貼られており、《鯉図／藤花図》は旧浜田県庁の跡に建てられた旧島根県那賀郡役所の所蔵であったことが明らかとなっている。とすると、後者のラベルの「新庁舎」は旧浜田県庁を指す可能性が高い。よって、浜田市教委本は《鯉図／藤花図》とともに、旧浜田県庁から旧島根県那賀郡役所へ伝えられた作品だと考えられる。

三―二 津和野高校本の概要

津和野高校本（図7）は杉戸着色の一枚で、法量は縦一六六・四cm×横一二七・二cm（外寸は縦一八二・三cm×横一四二・八cm×厚さ三・五cm）。片面には一羽の親鶴が座り込み、その周りで二羽の子鶴が羽を広げる様子が描かれる。もう片面には雪景色の中で柳にとまり羽を休める三羽の白鷺が描かれている。引手については、《鶴図》の面は梅菊牡丹紋（図8）、《柳鷺図》の面は浜田市教委本と同様（図9）である。



図4 | 栗本栞齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分) 津和野町郷土館蔵



图6 | 同(部分)



图5 | 山本栞谷《鶴図／柳鷺図》 浜田市教育委員会蔵



图8 | 同(鶴図部分)



图7 | 山本栞谷《鶴図／柳鷺図》 島根県立津和野高等学校蔵



图9 | 同(柳鷺図部分)

本作には、「備品 鳥根縣立津和野高等学校 庁用 衝立 2」と書かれたラベルが貼られている。鳥根縣立津和野高等学校という名称は昭和二十四年（一九四九）より使用されたものである。ラベルの文字が旧字体であることからして、昭和二十四年からさほど隔たらない時期にはすでに津和野高校の所蔵だったと考えられる^②。

三―三 出雲歴博本の概要

出雲歴博本（図10）は杉戸着色の一枚で、法量は縦一六六・五cm×横一二六・八cm（外寸は縦一八三・〇×横一四二・三cm×厚さ四・〇cm）。片面には四羽の鶴が身を寄せ合う様が描かれ、もう片面には羽ばたく一羽の白鷺が描かれている。引手は両面とも浜田市教委本と津和野高校本の《柳鷺図》と同様（図11）である。

本作は旧鳥根縣立博物館（一九五九年開館、二〇〇七年閉館）に所蔵されていた作品である。松江城三の丸御殿内の杉戸絵であると口承されてきたが^⑩、管見の限りではその根拠は見当たらない。なお、旧鳥根縣立博物館時代の管理ラベルが貼られており、そこには作者は「狩野派」と書かれているが、卑見では狩野派ではないと思われる。

三―四 浜田市教委本・津和野高校本・出雲歴博本の共通点と作者について

浜田市教委本・津和野高校本・出雲歴博本には多くの共通点があり、主なものを挙げれば次の通りである。

① 法量がほとんど同じである。

② 引手が津和野高校本の片面を除いて全て共通する（ただし、引手は制作当初のものとは限らない）。

③ 親鶴の尾羽は、先が跳ね上がり揺れるような状態で描かれている。（図12）

④ 鶴の足の姿態が近似し、鱗は絵具を盛り上げるようにして描かれている。（図13）

⑤ 鷺の目・鼻・口ばし・足の描写が近似する。（図14）

いずれの杉戸絵も剥落や後世の補筆が多いが、それらを差し引いて考えても共通点は多いと思われる。③については、旧津和野城内の杉戸絵



図10 | 山本梨谷《鶴図／柳鷺図》 鳥根縣立古代出雲歴史博物館蔵



図11 | 同(部分)



图 12 | 左：出雲歴博本 中：津和野高校本 右：浜田市教委本



图 13 | 左：出雲歴博本(親鶴) 中：津和野高校本(子鶴) 右：浜田市教委本(親鶴)



图 14 | 左：出雲歴博本 中：津和野高校本 右：浜田市教委本



図15 | 山本栞谷《林和靖図／松虎図》 個人蔵



図16 | 同(部分)

と伝わる山本栞谷《林和靖図／松虎図》(杉戸絵二枚、個人蔵、図15・16)にも確認されるときも、管見の限りでは他の画家にはあまり見られない特徴である。よって作者はいずれも山本栞谷と考えられ、その点でも御殿絵図の記載と合致する。

これらの共通点により、浜田市教委本・津和野高校本・出雲歴博本は山本栞谷が描いた一組の杉戸絵であり、津和野藩御殿内を飾っていたものと考えられる。

なお、三者の《柳鷺図》の面を見比べると、浜田市教委本と津和野高校本は画面が繋がらないが、浜田市教委本と出雲歴博本は画面が連続していても違和感はない。図柄や引手の位置を勘案すると、画面の順番は、《柳鷺図》の面に向かって右から津和野高校本、一枚未発見の杉戸絵を挟んで浜田市教委本、出雲歴博本であったと思われる。

四 《鯉魚図／藤花図》の概要

御殿絵図には、「御居間書院四の間廊下」内の二箇所に「杉戸 鯉魚」と記されている（図17の中央付近の上下）。ただし、作者の名前と反対面の画題については無記載である。この記載に合致する杉戸絵は、浜田市教育委員会に所蔵されている（図18）。

本作は杉戸着色の一枚、法量は縦一六八・三cm×横七七・四cm（外寸

は縦一八〇・三cm×横九〇・六cm×厚さ三・三cm）。片面には波に二匹の鯉魚、もう片面には藤花の垂れる様が描かれている。引手は両面とも菊に桐紋（図19）である。

《藤花図》の面の中央部には、「島根縣那賀郡役所印」と刻された印章が押されている（図20）。島根県那賀郡役所は明治二十九年（一八九六）に旧浜田県庁の跡に設置され、大正十五年（一九二六）に廃止されたため、本作はこの時期に同役所の所蔵だったことがわかる。また、《藤花図》の面

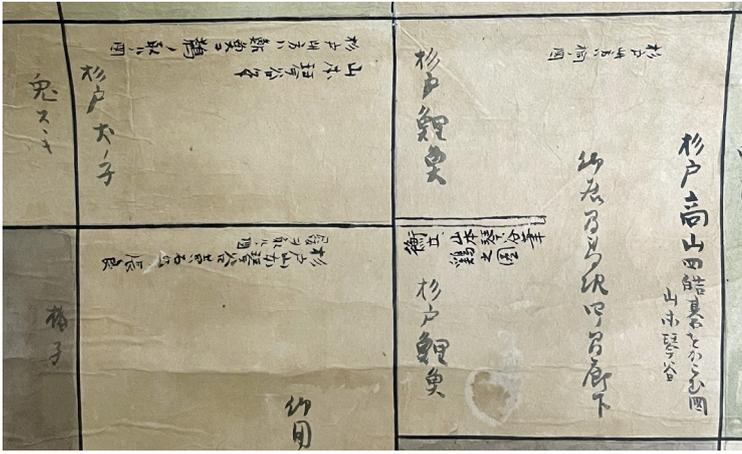


図17 | 栗本格齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分) 津和野町郷土館蔵



図18 | 《鯉魚図／藤花図》 浜田市教育委員会蔵



図20 | 同(印章部分)



図19 | 同(部分)

の左下には縦長の古いラベルが貼られている。焼けにより最初の「第」という文字しか解読できないが、このラベルは先述した浜田市教委本（鶴図／柳鷺図）のものと共通する。よって浜田市教育委員会が所蔵する《鶴図／柳鷺図》と《鯉魚図／藤花図》は、いずれも旧浜田県庁から旧島根県那賀郡役所へ伝わった作品だと考えられる。

《鯉魚図》の面に描かれる鯉魚の姿態は、山本栞谷《遊魚図》（図21）に近似的るとともに、波の描写に使われている小刻みに揺れるような筆線などを勘案すると、作者は山本栞谷が妥当と思われる。



図21 | 山本栞谷《遊魚図》 弘化3年(1846) 島根県立石見美術館蔵



図23 | 同(部分)



図22 | 《狗兎図／兎図》 島根県立古代出雲歴史博物館蔵

五 《狗見図／兎図》の概要

御殿絵図の「御廊下」の箇所には、「杉戸 犬ノ子・「兎ス、キ」と表裏の関係で記されている(図17の左上方)。この記載に合致する杉戸絵は、島根県立古代出雲歴史博物館に所蔵されている(図22)。

本作は杉戸着色の一枚で、法量は各縦一六九・五cm×横八五・五cm(外寸は縦一八〇・五cm×横九八・六cm×厚さ三・三cm)。片面には土坡の上を歩く子犬、もう片面には薄と二羽の兎が描かれている。引手は両面とも七宝唐花菱紋(図23)である。

出雲歴史博本(鶴図／柳鶯図)と同じく、本作は旧島根県立博物館が所蔵していたことが明らかとなっている。松江城三の丸御殿の杉戸絵であることが口承されてきたが、管見の限りではその根拠は見出せない。先述した通り、出雲歴史博本(鶴図／柳鶯図)が津和野藩御殿内の杉戸絵であった可能性が非常に高い以上、本作も同様とするのが自然である。本作の画題と御殿絵図の記載との合致も、単なる偶然とは考えにくい。

旧島根県立博物館時代の管理ラベルが貼付され、そこには作者は「狩野派」と記されているが、管見の限りでは狩野派とは思われない。狗見の姿態は、『渡辺華山先生錦心図譜』下巻(東京美術青年会、一九四一年)掲載の「親子虎」(作品番号三六二)に描かれている虎児の姿態に近似する(註)。よって作者は、華椿系絵師である山本栞谷の可能性が高いと思われる。

六 山本栞谷《王義之書扇図／李斯感鼠図》の概要

御殿絵図には「御鈴」の箇所に「杉戸 王義之ノ絵画／山本栞谷筆」と記されている(図24の下方)。ただし、作者の名前と反対面の画題については無記載である。この記載に合致する杉戸絵は、津和野町郷土館に所蔵されている(図25)。

本作は杉戸着色の一枚、法量は縦一五九・九cm×横七九・五cm(外寸は縦一七四・二cm×横九一・〇cm×厚さ四・〇cm)。片面は王義之が童子に墨を磨らせ、扇売りの老婆の前で扇に書す場面である。もう片面は李斯が鼠を見て、人の世に通ずる教訓を得る場面である。人物の姿態はデフォルメされた箇所が多く、丸い形をした童子の手などに山本栞谷の特徴が顕著に出ているため、栞谷筆と考えて良いであろう。引手は両面とも四つ柏形(図26)である。

伝来の詳細は不明であるが、津和野町郷土館は大正十年(一九二二)に津和野藩校・養老館の御書物蔵を利用して設立され、昭和十五年(一九四〇)に現在地へ移設されたことが知られている。



図24 | 栗本栞齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分) 津和野町郷土館蔵



图 26 | 同(部分)



图 25 | 山本栞谷《王羲之書扇圖／李斯感鼠圖》 津和野町郷土館蔵

七 山本栞谷《二十四孝図》の概要

御殿絵図の「御居間一の間」の箇所には、左上方に「フスマ張り壁此画皆／詩経を画く／山本琴谷筆」、下方に「フスマ 山本琴谷詩経の画」と記されている(図27の上方と下方)。この記載は「御居間一の間」の上下二箇所の襖に「詩経」の絵が描かれていたことを意味する。この記載に合致する作品としては、山本栞谷《二十四孝図》(個人蔵、図28)が現存する。

本作は紙本着色の全二十四枚、法量は各縦五〇・七cm×横三十六・八cm。二十四孝が一枚に一場面ずつ描かれている。画面に落款印章は無いが、人物表現や木々の描写など、随所に山本栞谷の作風が顕著にみられる。栞谷の作品の中で

も、緻密で繊細な描写が際立つ優品と評価し得る。

現在一枚ずつに分かれて額装されているが、紙製の袋が付属しており、そこには「琴谷筆 二十四孝図 捲り八枚 元御後室様御居間／九尺二間襖二口分」と記されている。この記載に従えば、本作は津和野藩御殿の後室の居間を飾る襖八面に貼られて

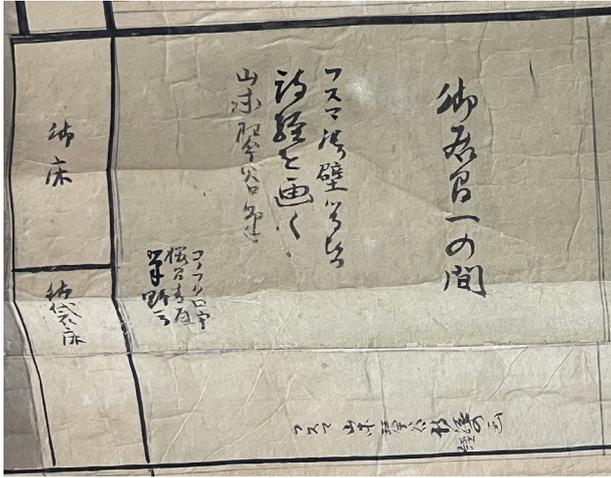


図27 | 粟本格齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分)
津和野町郷土館蔵



図28 | 山本栞谷《二十四孝図》 個人蔵

いたが(おそらく襖一面に対して三図ずつで計二十四図)、その襖八面が捲りの状態で袋に保管されていたことになる。その後、扱いやすいように一図ずつに切り分けられて現在に至るのであろう。袋の「襖二口分」という記載は、御殿絵図で上下の二箇所に分けて記されていたことも合致する。

ただし、御殿絵図に記載された「詩経」という画題は、本来は「二十四孝」とは別のものである点に注意を要する。御殿絵図では、本作が儒教的な教訓を表した画題と判断されたために「詩経」と記されたのではないだろうか。

八 山本栞谷《騎馬狩獵図》の概要

御殿絵図には「御居間二の間」の箇所に「此張り壁ノ絵 馬ニノ乗り獸ヲ射ルノ図 現今堀九郎兵衛ノ宅ニ大幅トナリ処有ノセラル」と記されている(図29の右下)。ただし作者については無記載である。この記載に合致する作品としては、山本栞谷《騎馬狩獵図》(島根県立津和野高等学校蔵、図30)が現存する。

本作は紙本墨画淡彩の掛軸(一幅)で、法量は統一四五・五cm×横一五〇・五cm。広大な川のそばで、馬に乗った二人の狩人が小さな獣を射る様子が描かれている。画面のトリミングに半端な箇所があるため、本来は現状よりも大きな画面であったと考えられる。落款印章はないものの、狩人の姿態(図31)や木々の描写など、山本栞谷の作風が顕著にみられる。

御殿絵図の記載に従えば、本作は元々襖絵であったが、掛軸の大幅に改装されて堀九郎兵衛の邸宅に所蔵されていたという。堀九郎兵衛は明治以降には津和野の商人として知られた有力者である(註)。その邸宅は昭和三年(一九二八)に売却され、昭和六年(一九三一)にはその跡地に現在の津和野カトリック教会が設立されたことも知られている(註)。

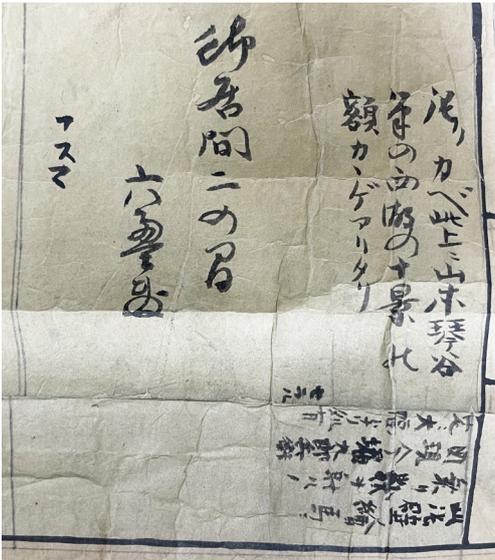


図29 | 栗本格齋《亀井家表御殿の全絵図》(部分) 津和野町郷土館蔵



図31 | 同(部分)



図30 | 山本栞谷《騎馬狩獵図》 島根県立津和野高等学校蔵

おわりに

本稿で紹介した津和野藩御殿内の障壁画を改めて整理すると、表2の通りとなる。

これまで見てきたように、津和野藩御殿内の障壁画は郷土史にとってはもちろん、幕末から明治初めにかけての石見地域における美術動向を考える上でも、非常に重要な作品群である。また、山本栞谷の基準作になり得る作品も含まれており、栞谷の画業を考察する上で欠かせない作品群になるであろう。

未だ発見されていない障壁画は多く、地道に調査を進めていくことが今後の課題である。

(当館主任学芸員)

表2 | 本稿で紹介した津和野藩御殿内の障壁画リスト

作者	作品名	材質技法・員数	法量	所蔵	伝来・備考
岡野洞山陳蓋	麝香猫図／野馬図	杉戸着色・2枚	170.9 × 139.2	津和野町教育委員会	旧津和野町民俗資料館(1971～2016)
			170.9 × 139.2	津和野町立津和野中学校	旧島根県立津和野高等女学校(1922～1948)
山本栞谷	鶴図／柳鷺図	杉戸着色・1枚	166.5 × 127.5	浜田市教育委員会	旧浜田県庁(1872～1896) 旧島根県那賀郡役所(1896～1926)
			166.4 × 127.2	島根県立津和野高等学校	現在の津和野高校(1949～)以前の伝来は不明
山本栞谷か	鯉魚図／藤花図	杉戸着色・1枚	166.5 × 126.8	島根県立古代出雲歴史博物館	旧島根県立博物館(1959～2007) 松江城三の丸御殿の杉戸絵との口承あり
			168.3 × 77.4	浜田市教育委員会	旧浜田県庁(1872～1896) 旧島根県那賀郡役所(1896～1926)
山本栞谷か	狗見図／薄に兎図	杉戸着色・1枚	169.5 × 85.5	島根県立古代出雲歴史博物館	旧島根県立博物館(1959～2007) 松江城三の丸御殿の杉戸絵との口承あり
山本栞谷	王義之書扇図／李斯感鼠図	杉戸着色・2枚	各 159.9 × 79.5	津和野町郷土館	津和野町郷土館(1921～)以前の伝来は不明
山本栞谷	二十四孝図	紙本着色・24面	各 50.7 × 36.8	個人蔵	元々は襖絵8枚(1枚につき3図ずつ貼付) 伝来の詳細は不明
山本栞谷	騎馬狩獵図	紙本墨画淡彩・1幅	145.5 × 150.5	島根県立津和野高等学校	元々は襖絵、後に掛軸に改装 堀九郎兵衛邸宅(?～1928)

- (1) 岡野家は江戸時代中期(十八世紀)より津和野藩御用絵師を務めた家柄である。駿河台狩野家・狩野洞雲益信(一六二五〜九四)に師事した岡野洞淵益清(一七五九)に始まり、岡野洞山陳蓋はその四代目である。一方、山本栞谷は渡辺華山・椿椿山に学んだ津和野藩出身の文人画家であり、嘉永六年(一八五三)頃に津和野藩主・亀井茲監(一八二五〜八五)より藩の絵師を命じられ、馬廻りの格に任じられたと伝えられている。よって、津和野藩御殿内の障壁面制作は、栞谷にとっては藩の絵師として携わった最初の仕事だと考えられ、後には明治三年(一八七〇)に亀井茲監から明治天皇へ献上された『艱民図』(皇居三の丸尚蔵館蔵)の制作も任されている。『艱民図』の成立と伝来については、田中純朗「山本栞谷・艱民図」の成立と伝来に関する考察」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』第二十九号、二〇一三年)参照。栞谷の伝記資料としては西田峻子徳「琴谷先生略伝」(『絵画叢誌』第一六八〜一七〇巻、一九〇一年)がある。
- (2) 『浜田市誌』上巻「浜田市総務部企画広報課、一九七三年」三二四頁、岩谷健三「近代の津和野」(『津和野歴史シリーズ』刊行会、一九七八年)三頁。なお、明治維新後、現在の島根県成立までの沿革はおよそ次の通りである。明治二年(一八六九)二月に隠岐県が設置、同年八月には旧浜田藩領と大森銀山領に加え、隠岐県を編入して大森県が設置、明治三年二月に大森県が浜田県へ改称、明治四年六月に津和野藩が浜田県へ編入。同年七月に松江藩の廃止に伴い松江県、広瀬県、母里県が設置され、十一月に同三県が合併し、浜田県から分離した隠岐を併せて島根県が成立。同年十二月に隠岐が鳥取県へ移管、明治九年四月に浜田県が島根県へ編入、次いで八月に鳥取県が島根県へ合併。明治十四年九月に鳥取県が再置され、現在の島根県に至る。
- (3) 『津和野町歴史文化基本構想・保存活用計画書』(津和野町、二〇一一年)二四四〜二四五頁、拙著「コラム2 津和野藩御殿内の障壁面について」(図録「企画展 没後一五〇年 山本栞谷と津和野藩の絵師たち」、二〇一三年、島根県立石見美術館)。また、神野真国編「濱田新聞紙六号(出雲屋幾太郎、一九七四年)、岩谷前掲書(註2)」によれば、津和野藩御殿とは別に津和野城内を飾っていた杉戸絵も現存していると考えられる。津和野城は明治六年(一八七三)の夏に払下げが決まった後、東京で入札が行われ、明治七年に津和野の商人である三上喜左衛門に落札された。城内を飾っていた杉戸絵は関係者の手に渡ったというが、それらの詳細は不明である。なお、西田前掲書(註1)には「往年津和野城普請のをり、杉戸張付等、巨大の絵画は、総て先生一人の手に成る、先生常にいふ、我が揮毫、却て巨幅を喜ぶは、実にこの以後にあり、伝へ聞く、廃藩後、居城も取払ひとなり、随て先生の筆も、四方に散逸せしと、惜むべきことになん」とある。
- (4) 津和野町前掲書(註3)二四四頁。
- (5) 栗本格齋による序文の全文は次の通りである。
つぬさはふ石見国津和野／城山の麓／亀井家表御殿の全絵／図／但この外大奥御殿 若殿／様御殿等は記憶を失し／これを略す／この全図は別に御間毎の裂れ／図あるを の合ひししを／して引合ひ其御間の続きを示／めす為めなれば御杉戸の絵面御／襖の形紙御壁張り御床御衝立／の絵面等は皆裂れず／に掲りて／見るものしす／但御杉戸のある御間及び重も／なる御間丈け裂れ図を製す／以前の御殿は嘉永六年四月十六日の大火／に御類焼／贈正／従二位隠岐守源朝臣茲監御代／安政の初年更ニ御屋敷壹万坪の内／へ御建築、安政三年三月七日落／成を告る処なり／以前の御殿の御杉戸の絵面は海／北友松の筆の由伝へ聞く処なり此／御殿の御杉戸の絵画は山本栞谷の／筆也其内庭間の御杉戸御日記／方入口の御杉戸の絵画は岡野洞山陳／蓋の筆なり／御居間御居間御書院御書齋等の御小庭／御梅林等もあらしを画くもの也／故従二位郷大正四年十一月十日特旨ヲ以テ正二位ヲ贈ラル／同年十二月廿三日同郷御墓前へ策命使掌典子爵／河蟠公篤公ヲ御差送／もと元和三年巳年／七月廿日／亀井豊前守源朝臣／矩政公因州鹿野城より／津和

- 野へ御引移り其際／ハ殿町にこれあり候処寛／永二年丑年二月八日大火／殿町御殿御類焼／寛永三年寅年五月此処へ／御普請御出来御引移り／嘉永六年四月十六日又々大火／に御類焼それまでの間の／年数二百廿九年也爰に／画く処の安政の初年に御／建築の分は明治四年廃／藩解き払ひて十八ヶ年なり／この絵面を製するにあたりたよるべき／控もなく只記憶に訴えこゆるきの五十とせのむかしを後らの世にすたらんことを／なげきつたなき筆に画き残／すになん／大正三年／七十翁栗本格齋謹書「格齋」(朱文方印)／かしこみつおそれみつ／もえかくな／五十とせ経ぬる君かむかしを／五十とせをかたらふ友も今ははや／のこりすくなになりけるかな
- (6) 増山嶺之「渡辺華山門下としての山本栞谷とその人物交流」(企画展「没後一五〇年 山本栞谷と津和野藩の絵師たち」、二〇一三年、島根県立石見美術館)、「椿椿山」(『魏町一件日録』(一八三九年、田原市博物館蔵)によれば、蚕社の獄で逮捕された渡辺華山の救援活動に山本栞谷、多胡逸齋、亀井家も参画している。
- (7) 本稿で紹介する杉戸絵には、伝来の過程でラベルが貼られている場合もあるが、破れ等により解説できないものや、現所蔵者の管理ラベルも含まれる。本稿では伝来を考察するのに有意義なラベルのみを取り上げる。
- (8) 『新修島根県史 通史編二(近代(臨川書店、一九六八年)七九〇頁、岩谷前掲書(註2)二八一〜二八六頁、『津和野高等学校八十年史 追補集』第五編(部活動史)(島根県立津和野高等学校、一九九〇年)、『津和野高校創立百周年記念誌(島根県立津和野高等学校、二〇〇九年)』。現在の島根県立津和野高等学校に至る沿革は、次の通りである。明治四十一年(一九〇八)に鹿足郡立として津和野高等女学校が設立、大正九年(一九二〇)十二月の県会で県立移管の意見書が出され、同十一年度から県立として運営される。大正十四年に島根県立津和野中学校が設立、昭和二十三年(一九四八)に津和野中学校を津和野第一高等学校、津和野高等女学校を津和野第二高等学校と改称、昭和二十四年に津和野第一高等学校と津和野第二高等学校が統合され、島根県立津和野高等学校が創立(校舎は津和野第一高等学校のものを使用)。
- (9) 前掲書「津和野高等学校八十年史 追補集」(註8)には巻末グラビアとして、津和野高校本と山本栞谷(騎馬狩猟図)(島根県立津和野高等学校蔵、本紀要十八頁参照)の図版も掲載されており、津和野高校本の作者は岡野洞山と記されているが、おそらく誤りである。「校内の遺墨」と題されたページもあり、そこには両作品とも社会科学室保管とある。
- (10) 過去には展覧会出品歴も有しており、「企画展 華麗なる御殿障壁面」(名古屋城美術展開催委員会、一九九六年)七十二〜七十三頁にも松江城三の丸御殿の杉戸絵として紹介されている。
- (11) 国立国会図書館デジタルギャラリー <https://dl.ndl.go.jp/pa/pid/8311987/1/225> (二〇一四年一月三十一日最終閲覧)。
- (12) 堀家の由来は戦国期まで遡り、元々は吉見氏の家臣であったが、吉見氏の退転とともに津和野に土着したと考えられている。江戸時代には津和野の町の有力者として重要な家柄である。正確には不明であるが、江戸時代中期には当主は堀九郎兵衛を襲名しており、幕末から明治・大正時代の当主はおそらく第十五代である。
- (13) 岩谷前掲書(註2)二九八〜三〇〇頁、昭和三年(一九二八)にカトリック伝道師のベテレーが堀九郎兵衛の邸宅を購入、昭和四年に伝道師がシェフルに変わり、堀邸を改築して「幼花園」が開園したが、同五年に幼花園及び神父館が焼失。同六年に教会堂・神父館・幼花園が再建されて現在の津和野カトリック教会に至る。

鼎談「建築で街は変わった？」 内藤 廣×洪 昌督×川西由里

島根県立石見美術館では、2023年9月16日から12月4日にかけて、企画展「建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt 赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」を開催した。この展覧会は、当館が所在する島根県芸術文化センター「グラントワ」の設計者である内藤廣のこれまでの仕事を、Built(実現した建物)とUnbuilt(実現しなかった建物)の双方によって振り返るものであった。

本稿は、同展会期中に関連プログラムとして開催されたトークイベント「建築家・内藤廣×MASCOS HOTEL『建築で街は変わった?』」の記録である。



開催日時:2023年11月25日(土) 15:00～16:30

会場:MASCOS BAR & DINING

(マスコスホテル内)



(右から)洪昌督、内藤廣、川西由里

内藤 廣

1950年生まれ。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001～11年東京大学大学院において教授、同大学にて副学長を歴任。2023年4月から多摩美術大学学長。主な建築作品に、海の博物館、安曇野ちひろ美術館、茨城県天心五浦記念美術館、牧野富太郎記念館、島根県芸術文化センター、静岡県草薙総合運動場体育館、富山県美術館、とらや赤坂店、高田松原津波復興祈念公園 国営 追悼・祈念施設、東京メトロ銀座線渋谷駅、京都鳩居堂、紀尾井清堂などがある。

洪 昌督

1980年生まれ。益田市出身。東京で音楽活動の傍ら映像製作を学んだのち益田にUターン。2010年デザインオフィス株式会社益田工房を設立。グラフィック、web、写真、映像製作で地域内外の仕事を多数手掛ける。グラントワからマスコスホテルまでの直線上にある益田駅前の活性化を目的とし、2019年に株式会社マスコスの新規事業でマスコスホテルを開業。企画展「建築家・内藤廣」では益田工房のクリエイターとして映像製作を手掛けた。

川西 由里

島根県立石見美術館専門学芸員。1974年生まれ。大阪府出身。大阪大学大学院文学研究科修了。2000年11月より島根県芸術文化センター建設室に学芸員として勤務。2001年の設計競技によって設計者として選ばれた内藤廣建築設計事務所とともに、学芸員の立場から建物の設計に関わる。2005年の開館以降、島根県立石見美術館で様々な展覧会を担当する一方、地域に展開するイベントや、劇場との連携事業も行う。

川西／本日はよろしくお願ひします。まず私から、このイベントを開催するに至った経緯をお話します。美術館の企画展の関連プログラムを館外で、こちらのホテルで開催することにした理由の1つは、マスコスホテルの代表である洪さんが、今回の企画展のために映像作品「瓦の壁」⁽¹⁾を撮ってくださったことにあります。洪さんはホテル経営をされていますが、映像の方が本業ですか？

洪／僕はこのマスコスという会社以外に「益田工房」というデザイン会社の代表も務めてまして、益田工房では映像と写真、それからアートディレクションを担当しています。

川西／企画展の展示室Aで上映している「グラントワ建築案内」⁽²⁾という、グラントワのスタッフが内藤さんに質問をして答えていただくインタビュー映像も、2015年に洪さんに作っていただいたものです。そして洪さんをお招きした理由はもう1つあります。このホテルができたのは、何年前でした？

洪／4年半前です。

川西／オープンの際に、「グラントワがあったからこのホテルを作った」とうかがっていましたが、ぜひ洪さんと内藤さんのお話を聞いてみたいと思って、このような場を設けさせていただきました。グラントワは開館して18年になりますけれども、最初は街に受け入れられるかどうか、かなり心配していました。内藤さんも建築が街にどう馴染んで行くか、気にされていたと思います。地元でグラントワを受け止めてくださった方の代表が洪さんだと私は思っていますので、それでこのトークを企画しました。まずは内藤さんに、このようなホテルができたことに

ついて感想をおうかがいします。

内藤／ホテルの宣伝した方がいいですか？[会場笑] 僕は、なかなかよくできていると思う。ですよね？[会場になげかける]

ちゃんとデザインされてるなと思いました。お風呂もいいし。洪さんのこだわりが色々あって、それがいいんですよ。

川西／温泉が出たからホテルを建てたとうかがいましたが。

洪／そうですね、なにせ、マーケティングを無視したホテルを建てることになるので、自信がなさすぎて、ちょっとでもフックが必要だなと思って。温泉が出たら温泉目当てにお客さんが来てくれるかもしれないなと思って、それで思い切って温泉を掘ったら出ちゃったんで、作るしなくなっちゃったっていう落ちです。[会場笑]

川西／洪さんは、東京から地元の益田に戻られたのはいつでした？

洪／2008年ですね。

川西／グラントワが開館して、3年経ってからですね。グラントワができたという話は東京まできこえてきていたんですか？

洪／いや、地元と距離を置いて、どうやったら帰らずにすむかっていうことばかり考えてたんで……なんかできるらしいよ、とはきいていたんですけど、全然意識をこっちに向けてなかったですね。それで、できたのを見てびっくりって感じでした(笑)

川西／最初にグラントワをご覧になったときの

印象は？

洪／まず、何で益田にこんなものがあるんだ！って思いますよね？[会場笑] 最初の印象としては、それが一番大きくて。申し訳ないんですけど、当時は先生のお名前を存じ上げてなくて、なんていうものを作る人がいるんだ！と思って。[会場笑]島根県、どうしちゃったんだろう？って思ったんですよ、本当に。どう考えてもやるのが無茶苦茶だなと思って。この衰退することが決まってる街に、なんでこんなものを建てたんだって思ったんですけど、僕はすごい勇気をもらえました。

内藤／それはね、澄田さんっていう知事が偉かったんですよ、やっぱり。僕が澄田さんから直接言われたのは、県の財政は厳しいけど石見に文化の砦を作りたいんだ、ということ。4期目だったんですけど、そうおっしゃって、このグラントワができたんですね。

川西／洪さんは益田に戻ってこられて、もう10年以上経ちますね？

洪／15、6年ですね。

川西／洪さんが離れる前の益田と、戻ってきた時の益田を比べると、やっぱり違いますか？

洪／今回のトークショーのタイトルは「建築で街は変わった？」ですけど、それでいえば、かなり変わったなって思います。僕は高校卒業するまでこの街で育ったんですけど、美術館というものはなかったんです。ということは、子どもには美術館に通う習慣もないわけですよ。美術館が街にないということは、一流芸術に触れる機会がないまま成長する、そういう場所で僕は育っ

たんです。それから10年以上経った今と比べると、今ここで生まれ育った子どもたちは僕たちが感じることでできなかったものを感じて育てる、っていうことを考えるだけでも、すごく変わりましたよね。

グラントワができてこの駅前を通りがちょっときれいになって⁽³⁾、僕が20代前半ぐらいの時までは、物騒で歩けないぐらい荒れてたんですよ、この飲み屋街が。そんなものもなくなったなって思って[会場笑]。そう考えると、すごく楽しい街になってきたと思います。

川西／私は大阪出身なのですが、グラントワができるということで学芸員の募集があったので応募して、2000年に島根県に就職しました。グラントワの建設準備室は、松江の県庁にあったので、3年半ほどは松江に住んで、益田に時々通ってくるという生活をしていました。2001年のコンペ⁽⁴⁾で内藤さんに設計していただくことになって、内藤さんとはそこからの付き合いです。内藤さんもグラントワが建つ前の益田に何度かいらしてると思うんですけども、その頃からすると道路も広くなったし、かなり街の見目は変わりましたよね。

住んでみた実感をいいますと、私は地元の人間ではないので、子どもの頃からの友達は当然いません。そうなると同世代で文化に興味がある人がどこにいるか分からなくて、それがちょっと寂しかったですね。美術館のお客さんとしてお話をする機会がある方は、だいふ先輩の方が多かったんです。もう少し若い、同世代ぐらいの人たちと地域を楽しむような交流ができればなあ……と思っているところに洪さんが帰ってきて、益田工房というデザイン会社を立ち上げてくださったので、やっと仲間ができたという感じがしました。それも含めて、この10年ぐらいで街に文化的な盛り上がりが出てきたかなとい

う実感があります。

ところで、内藤さんは全国いろいろな場所に公共の施設や、駅などを設計していらっしゃいますよね。しかも内藤さんの建物は地方の、県庁所在地ではない場所に建つ場合が多いように思います。益田以外の街で、内藤さんが設計した建物が出来た後に周りの動きが変わった事例があれば教えていただきたいのですが。

内藤／いくつかありますね。意外と僕が関わるとね、街が盛り上がる。

川西／それはすごいですね。

内藤／一番は日向市⁽⁵⁾かな。あそこは本当に変わりました。だけどやっぱり建物っていうのはきっかけで、本当はその裏にある、市民の人たちの感情というか動きが主体です。建物はそれをお手伝いするみたいな感じですね。日向市は、映画監督の山田洋次さんも深く関わっていて、僕が日向に関わり始めたのが1995年くらいですけど、山田洋次さんもその頃から付き合いがあって、東京で映画を公開するひと月前に、必ず日向のホールに市民を集めて封切りするんですよ。もう、ずっと続いています。それはどうしてかっていうと、山田さんが、普通の人がどういう反応するかを見たいので、日向市でやるんですね。だいたい封切りの時は主演の女優を連れてきますから、街全体が盛り上がる。そういう時期に僕も駅舎の設計をやったり、それから駅の周辺をやったり市役所をやったりしました。建物だけじゃなくて、建物の裏側にあるものがちゃんと盛り上がってくると、ああ建物やってよかったなって感じますね。

益田も美術館の活動が素晴らしいので、そのサポートができるってところが建築の役割かなっていう気もする……、って感じですね。

川西／内藤さんが設計された建物に行ったり、企画展の解説で書かれているような建設の経緯を読んだり、あとはコンペに応募された時に書かれたコンセプトなどを読んだりしていても、やっぱり人が集まることとか、人の生活とかについて常に考えられていることを感じ取っています。内藤さんは建物ができた後もそこに出かけたり、その地域の方達と連絡を取り合ったりされることが多いようにお見受けしています。今回の展覧会でも、わざわざ遠方の街の方達がグループで来てくださっています。オープニングの時には周南⁽⁶⁾の方が来てくださっていました。

内藤／それから日向の人たちも今日来ていて。

川西／渋谷⁽⁷⁾のみなさんも、30人くらい団体で来てくださいました。

内藤／渋谷の人たちはね、僕の設計した建物を年1回見に行ってるんですよ。団体旅行の口実には僕が使われてるんですけど、毎年出かけてるみたいです。

川西／益田のみんなで内藤さんの他の建物を見に行ったことってないですね。洪さん、ツアーやりませんか？

洪／そうですね、やりましょう(笑)

川西／他の地域と交流してみたいですね。内藤さんの建物が建ってどうですか？って、きいてみたい。

洪／確かに。交流してみたいですね。

川西／建築家は誰しもそうだと思いますが、

内藤さんが建物を設計される時は、その街の歴史や文化も調査されていますよね。ご著書やご講演などで、設計する前に益田を訪れた時に「つかみどころがない街だと思った」とおっしゃっていますが、今もそんな印象なんですか。

内藤／今も、そういうところがあります。つかみどころがないっていうのは、物がなくていうんじゃないんですよ。中身があるんだけど、とらえどころがないような文化が、不思議とこの街にはあるんですよ。何より、とにかく食べ物がうまい。特別な料理じゃなくて、スパゲッティ・ナポリタンを食べても美味しいし、チャーハン食べても美味しいし、もちろんお刺身を食べても美味しい。こういう街は、そんなにはないですよ。食べ物の文化があるっていうのは、やっぱり歴史の背景があるんだろうなと思うんです。この街は背後の見えないところに文化の塊があるんですね。それが不思議です。

川西／洪さんは、そういうことを実感したことはありますか？

洪／僕、本当にこの街には帰ってきたくなかったんですけど、毎回実家に帰る時に楽しみにしてたのが、駅前中華料理「豊味軒」の春巻きだったんですよ。あの春巻きが食べられるなら帰る価値あるな、ぐらいに思ってた。でもUターンしたらその春巻を作らなくなっちゃって(笑)

内藤／ここ(マスコスホテル)で作ればいいじゃない。

洪／実は、作ってます。ちょっとインスパイアされたものを出しているんですけど……もともと僕がこの場所にホテルを建てたかったのは、こ

の飲食店街が島根県西部で断トツで、お店の数も多いし、美味しいお店も多いから、街をあげてちゃんとPRしなきゃなってずっと思ってたからで。ホテルに泊まって、歩いて飲食店街に行けたら楽しいだろうと思ったんですよ。

川西／内藤さんは、グラントワの西エントランスも飲食店街へつながるように設計されましたね。

内藤／それは僕というよりは、コンペの審査員長をされた大高正人さんという建築家からのアドバイスです。都市計画もずいぶんやられている方。大高先生のところに行った時に、ここ1本通してくれないかっていうので、当時もう設計はある程度進んでいたんですけど、ちょっと建物をずらしたりして、あそこにまっすぐつながるようにしたんです。やってよかったと思いますよ。

川西／小ホールとレストランの間にある西エン

トランスを出て街の方に向かうと、スカッと通りが見通せます。グラントワに近いところは図書館や市役所など公共の建物や住宅がしばらく続くんですが、その先に飲食店街が現れます。地元のみなさんにはグラントワから飲食店が近いという印象はないかもしれませんが、数百メートル歩けばたどり着くんですよ。でも、その動線をまだ充分には活用できてないですね。グラントワからマスコスに来る際も、飲食店街ではなくて広い「グラントワ通り」を通る方が多いと思います。洪さん、ぜひ飲食店街を通る裏動線をPRしましょう。

洪／そうですね。でも夜は裏通を通る方が多いですよ(笑)

川西／そういえば内藤さん、グラントワには今話題になった「西エントランス」を含めてエントランスが3カ所ありますが、どういうふうに考えて正面と南と西を考えられたんでしょうか。



図1 | グラントワの中庭広場、美術館側から小ホール側を見た光景 Photo: Shotoku Ko

内藤／あんまり真面目に考えてなかったよね(笑) 要は、基本的には真ん中に広場(図1)があって、回廊があって、街の人はどっかから、いろんなところから入って、通りすがったりとか、そういうのでもいいかなって思ってやったので、どのエントランスがっていうのはありません。建物としては、あの規模の建物としてはそういうのが無い建物ですよ。普通はあの規模の建物だと、ここが入り口「どーん」みたいなのがあるんだろうけど、そういうのがなくて、周りからなんとなくウロウロとやってきて、中庭に行つて、それからそれぞれの施設に散っていくっていうのがいいかなと思ったので、あんまりエントランスは意識してなかったですね。

川西／そうですね、グラントワには「ここがメイン」というのがないですね。施設の中心は中庭ですけども、そこが特定の役割を担っているのではなくて、周りの美術館や劇場や、ショップやレストランをゆるやかにつないでいます。

内藤／よかったのは、散歩ついでに寄るお年寄りがいたりとかね、高校生がうろっと通り抜れたりとかね、なんかそういうのがいいなあ。ここがエントランスです、ここが裏口ですっていうと、なかなかそうはいかないじゃないですか。だけどあそこの中庭は、時たま通りがかったような人がよくいますよね。

川西／そうですね。高校生が宿題していたり。洪さんは高校時代にグラントワがあったらどうだったと思います？

洪／いやあ、グラントワがあったら絶対に勉強してた気がしますね(笑) 人生変わってますよ。東京から帰って来てないかもしれないですね。

川西／開館以降、美術館では学校の行事としてやって来る、たくさんのお子どもたちを受け入れています。もう18年経ちますので、開館した頃に来てくださった人は社会人になっているわけですが、グラントワができる以前に学校を出た人たちと比べると、子ども時代の文化体験がかなり違うのではないかと思います。劇場では保育園の発表会から高校の文化祭までやっていて、とても贅沢だなあとと思います。発表会だけでなく卒園式を「多目的ギャラリー」でやる保育園もありますので、本当に生活に密着した施設になっていると思います。美術館として単独で存在していたら、さすがに卒園式はできませんので、元は県の都合で美術館と劇場の複合施設になったんですけれども、今となってはありがたいことだったと思っています。

それから、中庭のメリットも大きいですね。私は職業柄よその美術館にも行くんですけども、展覧会を観た後にポーッとできる場所がないことが多くて、お店とかレストランはあるんですけど、お金を払って別の行為をしないとイケない。そうでなければ、すぐ次の目的地に行こうということになって、余韻に浸る場所っていうのが意外となくて。本当に中庭があってよかったなって思っています。

その先に、街に出ていくというか、街の人たちと一緒に何かする動きも最近ちょっとできてきたので、あと10年経ったら、洪さんみたいな人たちが、グラントワが直接関わっていても、関わってなくても、何かこの街で始める方が出てきてくれるといいなあという願望があるのですが……洪さん、何か今後の展望がありますか？

洪／そうですね、基本的に夜がメインの飲食店がこの通りには多いんですけど、グラントワとこのホテルを繋ぐ裏の通りに、もっと昼のお店

があっても面白いんじゃないかなと思ってます。さきほどの、街がどう変わったかっていう質問に一つ加えると、グラントワができたおかげでインテリ層がこの街に流入してくるようになったというのがあります。どういうことかという、まずは文化人がホールでパフォーマンスをしたり、講演をしたりというのもあるし、美術館の展覧会を目指して来られる方が街に入ってくるようになったわけですね。そういう人たちと触れ合う機会が増えたというのは、僕としてはすごく大きくて。その方達が、夜のお店を楽しむのはもちろんいいんですけど、昼に歩いてもうちょっと楽しめるようなお店を、若い子たちが起業してくれたらすごく嬉しいですね。

川西／カフェとかそういう感じ？

洪／カフェに限らず本屋さんでも、雑貨屋さんでもいいんですけど、なんか面白い、その人個人のこだわりのあるお店ができると、より良い街になると思ってます。

川西／内藤さんから展望というか、益田に対して希望みたいなものはありますか？

内藤／希望はたくさんあります(笑)僕は、いつまでも東京が強いとは思ってなくて、僕も色んな開発計画の面倒見させられたりしてますけど、ぼちぼち違ったトレンドが出てくるような気がして。こっから先は日本は地方都市が強くなるかと生き延びられないと思っていて、まあそれを信じてるっていうか。そうすると、しばらくすると東京の高齢化率を島根県が下回るっていうのが近いんですよ、実はね。だからね、島根県はね、ある種、先進県になるんです。だからそこで、いろんな文化だとかお店とかがいい意味で発祥するような場所が作れたら、まあ極端なこ

とをいうと島根県がトップランナーになるっていうこともあるんですよ。なので、ぜひそれをやってもらいたいなと思います。やっぱりそのためには本屋さんとかね……本屋さん欲しいよね。

洪／本屋さん欲しいですね。昨日ちょうど別のオンライン会議があって、同年代4,5人でこの益田のこれからを話したんですけど、益田って、山陰のイメージとちょっとかけ離れているよね、ってなったんですよ。それは益田の人の気質なんですけど、「赤鬼と青鬼」でいうと限りなく赤鬼なんです、益田の人は。適当で能天気なんですよ、僕を含めて。なので外からの人も受け入れるし、明るい人が多いんですよ、とにかく。それってある意味コミュニケーション力が高くて、突破できる力みたいなのを持っているんじゃないか、という話になりました。

川西／内藤さんは以前に、日本の美しい場所は山陰のあたりにしか残らないんじゃないかっていうお話もされていましたよね。

内藤／僕は結構、地方の仕事を、まあ地方っていう言葉は好きじゃないんですけど、色々していますけど、日本の良いところが残るのは発展ということと違うロジックの場所……まあ、置いていかれたといえばそうなんだけど……そこにしか残らないと思っています。長門周防の辺りから石見にかけてのあたり、それから秋田の鶴岡のあたりから日本海側の沿岸とか。日本のちょっと前のいいところは、そのあたりにしか残らないんじゃないかなって、実は思ってるんです。あとはもう経済発展しちゃって、変わってしまってますけど。益田とかこの周辺に漂っている、よく分からない空気という話をしましたけど、たぶん日本がかつて持っていた良いところが漂っているんじゃないかな、空気みたいに。そ

れはこれからも多分、残っていくんじゃないかなって思います。

川西／その漂っているものをどうキャッチするかっていうのはなかなか難しいんですけど、洪さんは、なんとなく自然体でそれをやって、このホテルを作ったということなのかなと思っています。都会的なものを目指してこのホテルを作ったわけではないですよね？

洪／はい、全然それは違いますね。僕はだいたい直感で生きてきたんですけど、地方にたまたま僕は住んでいるけど、自分がやりたいことっていうのはどこにいてもそんなに変わらないだろう、というのがまずあるわけですよ、自分の中で。

それで、質問への答えからずれてくるかもしれないですけど、ホテルを建てようと思った時にふと思ったのが、建築って結構暴力的な行為だなんていうこと。建築って景観を左右するじゃないですか。写真とか音楽とかっていうのは、物理的にはすごい小さなものだし、音楽なんかプレイヤーがないと聞こえないし。だけど建築だけは常に人の目の前に立ちはだかってくるじゃないですか。その時に、建築家ってすごいなって思って。それで僕が一番このホテルで気にかけて、僕がやった仕事は、色のディレクションですね。

川西／外観の色ってということですか？

洪／外観の色はすごくこだわりましたね。

川西／この街に馴染む色を目指したということですか。ベージュ系の色ですね？

洪／そうですね、ライトグレーやベージュ系の色で、オリジナルの三色のタイルを組み合わせています。なるべく目立たないようにしようと思ったんですよ。だから気づかない人が意外にいるんですよ。地元の人にも「あれ、あったっけ？」って言われるぐらい。(図2)

川西／グラントワはちょっと目立ちすぎですか(笑)

洪／いやいや違います、グラントワを引き立てるためにホテルは目立たない色にしたんです[会場笑]

川西／やっぱり大ホールがあると、目立たないっていうのは不可能ですね。

内藤／フライタワー⁽⁸⁾(図3)っていうのは、もう仕方がなくて。あれが大きい壁で、これはもう、しょうがない。あの壁がどうなるかっていうのは本当に心配だったんですけど、まあまあ近隣の



図2 | マスコスホテル外観 Photo: Shotoku Ko



図3 | グラントワ大ホール外観、写真左手の高い部分がフライタワー

方も受け入れてくれてるみたいなのでよかったなと思いました。

川西／フライタワーというのは、ホールの三角屋根の隣に、直方体でそびえたっている部分のことで、大ホールでは33メートルもあるんです。内藤さんは、正面から見て大ホールを一番奥に配置したということですが、大きなものが出過ぎないような気を遣われたということですよ。私は先日、福井県の一乗谷朝倉遺跡博物館(図4)に行ってきました。戦国武将の朝倉氏の拠点だった地域に、街や屋敷の遺構を補完するように作られた博物館を内藤さんが設計されています。レンタカーを借りていったんですが、遺跡から少し離れてるところにあったということもあって、ちょっと迷ったんですよ。事前にホームページなどで、グレーの三角屋根が4つ連なっている写真を見て、結構大きい建物だろうと予測していたんですけども、意外と目立たない。写真のイメージを探して車で走って、田んぼの中にあ

るから遠くからでもすぐ分かって思っていたら、分からなくて……っていうのは内藤さんの狙い通りなんですか？

内藤／思った通りですね。ステルス系建築(会場笑)姿を消せば正解、みたいな感じがありますね。一乗谷はね、周りの山が綺麗なんですよ、それほど高くないけど。それで、できるだけあの田園風景を壊さないようにと思ったんですけど、博物館っていうと、やっぱり大きくなるんですよ。できるだけ馴染むような格好にしようとしたんですけど、川西さんが迷ったっていうのは僕は心の中で、ほくそ笑んでよしよしという風に思っています(笑)

川西／グラントワは大きいし目立ちますけど、やっぱり石州瓦なので、突然異質なものが入ってきたという感覚は、意外と無いのかなという風に思います。



図4 | 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館の外観 写真提供：内藤廣建築設計事務所

内藤／フライタワーみたいな垂直の壁に瓦を使ったっていうのは、誰もやってなかったことです。地元の方は不思議な印象だったと思うんだよね。よく知ってる材料なのに、なにか違うっていうのが。不思議な関係性ができたんじゃないかなと思います。近代的な材料であの大きい壁を全部やったら、すごいでっかいものができるっちゃったなってみんな思うんでしょうけど、あんまりそういう人はいないんですよ。それは良かったと思います。

川西／意外と重たく見えないんですよ。石州瓦って、屋根の角度で葺かれている場合はぺたりしたっていうかマットな色に見えるんですけど、なぜか垂直に立てると透明感が出て、軽やかな感じの色に見えるんですよ。なぜかは分からないんですけど。でもそれは内藤さんの計算外だったんですよ。

内藤／建築をやってると、計算外のことがたくさん起きてくるんですよ。あらかじめ考えてやったんだったら僕は天才だと思いますけど、残念ながら、あらかじめは考えてないんですよ、それが。一生懸命やってると、時たま偶然なんか素晴らしいことが起きるってことは幾度かあるんですけど、グラントワのあの瓦の壁はそういうものの一つです。あんなものができると思ってなかったですから。だって、七色というか五色くらいに変わって見えるんですからね、朝昼夕方。そんなものって他にないですよ。だけど、よかったな。あれがなかったら多分こんな展示会もなかったろうし(笑)、こんな場所でお話しさせてもらうこともなかったとは思っています。

川西／私は内藤さんがコンペに出された案で、「壁も全部瓦にします」というのを見て、正直

ちょっと心配というか、もっと重い印象になると思ったんですよね、アルマジロみたいな。周りにほとんど大きな建物が無いところに、鎧みたいな茶色の色面が30メートルも立ち上がると、かなり浮くんじゃないかとか、色々心配だったんですけど。石州瓦の秘めた力というか誰も気づいてなかった魅力がひょっこり出てきてくれて、本当によかったです。

内藤／誰も気づいてなかった、僕も気づいてなかったんです。

川西／瓦屋さんも？

内藤／瓦屋さんが一番びっくりしたみたい。普通に屋根に葺くのはもちろんずっとやってるわけだけど、垂直にした時にどういう風に見えるかっていうことについては、瓦をやってる人が一番びっくりしたんじゃないかなと思います。

川西／最初に瓦を扱ってらっしゃるみなさんに、壁に使いますって言った時の反応は、どうだったんですか？ 心配されませんでした？

内藤／心配だったでしょうね。だって、やったことないんだし。それを実現するのにかなり色々な知恵を使わなきゃいけないので、壁に使う瓦は、一年ぐらいジョイントの仕方だとか固定の仕方だとかを試行錯誤していました。それだけじゃだめで、窯に入れてうまく焼けるかどうかという話もあるので、そこは瓦屋さんと相談したり、葺いてくれる職人さんと相談して色々やりましたけど。うちのスタッフが一人専属で担当して、一年かかりました。

川西／その瓦の使い方を決めるのに一年かかったということですか？

内藤／そうです。これだったら大丈夫だ、っていうところまで。なんせものすごく広い壁面を覆うわけですから、失敗したら大失態ですよ。なので、すごく慎重にやりました。

川西／瓦の色は全部一緒じゃなくて、5色をランダムに混ぜてますよね？ その色は、内藤さんがサンプルの中から選んだりしたんですか？

内藤／それには事情がありまして。昔の石州瓦の屋根っていうのは登窯でやってたんですね。そうすると均質には焼けないので、伝統的な石州瓦の屋根の色はまだらになってるんですよ。昔は、よくできたものは売り物として北前船で運んで他で売ってたので、地元ではどっちかという商品ににくい不揃いなものを使ってた。伝統的な石州瓦の色味には、かなりばらつきがあるんですよ。だから少し、それに寄せようと。今はガス窯で焼きますから、均質にできちゃうので、じゃあ5種類ぐらい色の違うものを組み合わせようっていうんで、そこは意図的にやらせてもらいました。

川西／みなさんも、この地域のお家の屋根をよく見ていただきたいのですが、古いお家の屋根は、内藤さんがおっしゃるように、色がまだらで味わいがあるんですよ。新しい瓦だと、普通は全体が均一な色の屋根になるんですけど、最近、新しいお家でも、あえて2色とか3色とか混ぜてるのを見かけるようになってきました。

内藤／そうなの？

洪／そうそう。

川西／グラントワを見て、こっちの方がいいって思ったんじゃないかと。ところで内藤さんは、

単に地場産業だから使ったんじゃないくて、石州瓦の耐久性に注目されて選んだとうかがっています。他の建物でもその土地その土地の素材をお使いになってますよね。

内藤／やっぱり地元の材料を使うと、市民の方といきなり距離が縮まる感じがあるんですね。それが一つ。それから二つ目はね、エイジング。要するに年の取り方がとてもいいんですよ。例えば木なんかでも外から持ってきた木を使うよりも、その場所で採れた木を使うと年の取り方がいいんですね。これやっぱり風土なのかな。なので、そういうのはやるんですけど、これ見よがしに地元です、っていうのはやらないようにしてるんです(笑) それは、例えば昔一時、世間的にも随分批判されましたけど、土木工事でトンネルをやると、トンネルの入り口に地元の竜かなんかの模様を描いたりとか、橋の欄干とかにも地元の色んなもののデザインがついていたりするのが、あったじゃないですか。そういうのは僕は違うと思っていて。あんまりそういう風なものを建物に持ち込みたくないの、もっとベーシックに、基本的にその場所でする一番いいものをどうやって組み合わせることができるか、っていうことを中心に置きます。結果、それが風土に繋がってるっていうのは嬉しい話ですけど。

川西／すぐにご当地キャラクターとかをつけちゃうんですよ。まあ、県もよくやっていますけども(笑) なんでここにいるのかな？っていうのがよくあります。[会場笑]

内藤／県、好きだよ、そういうの。

川西／ところで、洪さんはここのホテルで地元のクラフトを活かすようにされていますよね。

洪／そうですね。こっちに帰ってくるまで知らなかったんですけど、結構職人さんがたくさんいらっしゃって。すごく腕のいい木工職人さんとかが。で、そういう人たちとすごく仲良くなったんで、できればそういう人たちの技術を活かしたいなという思いでお願いして、家具とかも全部、オリジナルで作ったんです。

川西／今みなさんが座ってらっしゃる椅子も。

洪／そうですね。自分もクリエイターだということもあるんですけど、オリジナリティをどこまで出せるか考えて、それが地元の仲間とできたら楽しいし、外から来てくれた人たちからも「やるじゃねえか」と思われる、そういうものが欲しかったんですね。

川西／このレストランの食器もそうですね。

洪／食器は石見焼と萩焼と、あと石州瓦を焼いている亀谷窯業さんの食器です。僕たちでデザインして、これをお願いします、という感じで作ってもらっています。

川西／ということですので、皆さん家具とか食器とかにもご注目ください。それから服飾、シャツとか部屋着とかも作っていらっしゃるんですよ。

洪／そうですね。スタッフが着ているシャツもそうなんですけど、元々縫製が盛んな街だったので、まだ大きな工場が一つだけ残ってるんですけど、せっかくならその技術を使って。デザインは自分たちで考えて、みたいな感じですね。

川西／デザイン会社とホテルを両方持ってるって、すごいですよね。

内藤／すごいですね。

洪／いやいやこれはすごくないんですよ、全然。もう、火の車ですから[会場笑]

川西／運営や経営は大変だと思いますけど、ホテルで使うものを自分たちでプロデュースして地元で作るという仕組みがすごい。

洪／そうですね、やっぱり僕も、アートディレクターをやってるんで、もういろんなものが気になって仕方ないんです。だからこのホテルに出てくるものは全部、メニュー一つとってもそうなんですけど、自分のデザイン会社でやっちゃう。それも本当に疲れるんで、スタッフたちは辟易してると思いますけど。

川西／それは大変(笑) デザインの細かい所まで神経を行き届かせようとする、本当に難しいですよ。美術館で働いていても思うんですが、デザインに対してお金を払うっていう感覚がなかなか日本の組織、特に役所の中にはないので、うっかりすると知らないうちに驚くようなものができてたりします。美術館ではその辺をできるだけコントロールしたいと思ってるんですが、そういう意識を、グラントワとマスコスから街にじわじわと広めていけたらいいのかなと思ってはおりますが……なかなかね。人の作ったものにダメ出ししづらいところはありますよね(笑)

洪／そうですね、元々美術館もなければデザイン会社もなかった街なんで、そういったものにお金を払うっていう気持ちは全く持ち合わせていないんですよ。最初は本当に、見積もりでも、デザインの見積もりを見たことがないっていう企業さんも本当に多くて。

内藤／そうですね。

洪／はい、なんでこんな高いんだ!って、めちゃくちゃ言われたんで、そこはすごい苦労しましたね。最初の3年とかは本当に苦労して……今はそれでも徐々にデザインというものにお金を払わなければいけないっぼいぞ! [会場笑] みたいな感じにはなってきたかなと思いますけど。

川西／デザイン料をきちんと払ったら良いものができる、そこが無駄だと思わないように、っていうのはやっぱり教育なんですか、内藤さん?

内藤／要するに物作りとか物とかっていうものが、手間ひまかかってできるもんだって思っていないんですよね。デザインって要するに手間ひまかけるってことだよ、こだわって。

洪／はい、そうですね。

内藤／この国は、昔は旦那衆みたいなのがいて、そういうのを上手く養ってたんですよ。旦那衆がいなくなっちゃって株式会社になって、そうするとコンプライアンスとかいってね、あんまり無駄するのはまずいよねっていうことになって、で、この国の文化は減じる(笑) こういう流れを、なんとか止めないといけないんですけど。例えば皆美味しいものが当たり前だと思ったら、まずいものを食べた時に嫌じゃないですか。僕らがふだん食べているお米なんていうのは、グローバルで見たらすごいレベルが高い。そんなお米をみなさん毎日食べてるわけですよ。それがある日ちょっと手を抜いたお米がご飯に出てきたら嫌じゃないですか。文化ってそういうもんだって思わないといけないんだよね、きっと。だからレベルを上げていくと、あんまりデザイ

ンされていないものとか、手間ひまかけていないものが嫌だってみんな思うようになります。その手間ひまをやる人が飯食ってかなきゃいけないんで、当然お金を払わなきゃね、ってなってくれるといいなって、僕は思います。たぶん次はそういう風になってくんじゃないかなと思います。それじゃないと多分、生き延びられない時代が来るんじゃないかなと思います。

川西／そうですね。グラントワができてもうすぐ20年で、益田工房は10年ぐらいですか?

洪／14年ぐらいになりますね。

川西／じゃあ、あと10年経ったら、また変わってるかもしれないですね。

洪／それを願いたい(笑)

内藤／人口減少に歯止めをかけちゃうかもしれないね。

洪／そう。テック系のすごいスーパーナードくんみたいなのが益田にきてほしいなと思ってて。文化とかアートにすごい関心の強い若者が来たら、結構面白いことできるんじゃないかって思ってるんですよ。「ブラックベリー」っていう携帯の端末の会社の創業から衰退までを描いた映画があって、それを見たら、そこの最初のスタッフたちがみんなスターウォーズ好きのスーパーナードなんですよ。「今日は映画があるから、仕事はやめて見に行こうぜ」みたいなノリで。そういう面白い人たちが来て欲しいなと思ってます。

川西／どうやったらそういう人たちを呼べるんでしょう?

洪／内藤先生の呼びかけで[会場笑]

内藤／そういう連中がきた時には、やっぱり泊まる場所はここ？

洪／そういうことになりますね、マスコスホテルにぜひ。

内藤／いいと思いますね、足がかりはここで。

川西／展覧会と宿泊と、食はもうすでに美味しいものが沢山あるので、何かもうちょっと？

洪／そうですね。そっち系の脳が欲しいな。

川西／では、このあたりで会場のみなさんからご発言いただきましょうか。

観客1(男性)／グラントワができる前、この地域に県立大学ができることになった時、浜田市と益田市とどちらに建てるか、ということがあったんです。その時は益田が負けましてね。じゃあ他に文化的なものと、女性がかなりの人数集まって署名活動をしました。それで2万3千人分集まったのかな、この小さい街でね。それを持って澄田知事のところへ陳情に行きました。女性が10人ばかりと、私も、その時の益田の神崎市長さんも、一緒に知事のところへ行きました。とにかく益田に文化的なものを作って欲しいから、ひとつお願いしますと⁽⁹⁾。署名もかなり集まったので、知事さんもびっくりして、それで益田に文化的なものを作ろうという話になりました。それで美術館と、ちょうどその時に古くなっていた県民会館を一緒にした、複合の施設になったわけです。本当にグラントワできてから文化的な事業がどんどん進んできて、今の子どもさんたちはグラントワでいろんな展示があって、ずい

ぶん文化レベルが上がってきとると思います。洪さんもこうやってホテルを建てられて、皆さんがやっぱりそういう、益田のいろんな事業を支援しようっていう人がだんだん増えてきとる。その中で、これから先、さっきも言われましたように都会から田舎にとんとん人が来るような状況になってきています。今の益田のいいところをしっかりと残して、それで色んな人に来ていただいて益田が活気づくことを先頭切ってやってもらとるんで、それをより一層、続けて欲しいなと思っております。

川西／ありがとうございます。グラントワができるまでの歴史もご存じの、地元の重鎮からお言葉をいただきました。[会場拍手]

内藤／これを聞いたらもう引き下がれないね。

洪／そうですね(笑)

川西／美術館で働いていると、都会から人を呼べとか、宣伝が足りないとか、よく言われるんですけど、美術館単独ではなかなか厳しいんです。それで、内藤さんが以前本に書かれていた、観光っていうのはその地域の人がいい暮らしをして、それを他所から来た人に分けてあげるものだ、っていうお話を思い出したんですけど。

内藤／はい。ちょっと説明しますと、それは湯布院のことで。中谷さんっていう亀の井別荘のご主人ですけども、元は映画関係をやられてたんです。で、30年ぐらい前に会った時に、ともかくうまい酒が飲みたいと思ったら自分たちで作る、他人に売るとかっていうんじゃない。それからいい映画を観たいと思ったら自分たちで映画祭をやる。それで、都会の人にはお裾分けをしてあげると。都会の人は可哀想な暮らしをして

るんでお裾分けする、っていうことを中谷さんが言われていて、それは素晴らしいなと思ったんですよ。だから、地方で街をなんとかしようと思ったらず自分たちが、うまいもん食っていい暮らしをする。で、都会の人はそれのおこぼれをいただきにあがるっていう、そういう考え方でいいなって思って、色んなところで言うようにしています。湯布院は今やちょっと人が集まりすぎちゃって逆に困るっていう話になってきてますけど、かつては本当に潰れそうな旅館ばかりだったんですから。それを違う方向に向けた中谷さんはすごいと思う。自分たちで映画祭やるっていうあの感じは、素晴らしいと思いましたね。洪さんにもちょっと繋がる場所があるかな。

洪／僕は元々映画監督になりたかった人間なんですけど、益田には14年ぐらい映画館がなくて。最後に廃業した映画館を復活させた人がいて、2022年に「Shimane Cinema Onozawa」⁽¹⁰⁾っていう映画館ができたんです。それもこの街にとって、すごい前進というか。

川西／場所は、丁度ここ(マスコスホテル)とグラントワの間ぐらいですね。

洪／そうですね。そこの館長と、自分たちが観たい映画かけようぜってなって。それで僕、ウォン・カーワイっていう監督が大好きなので、1月8日にウォン・カーワイを3本やるんですよ。観たい人はぜひ観にきてください! [会場笑]

川西／この街が面白いのは、人口が少ないから誰が何をやってるかが分かりやすいし、自力で何かやるというのが意外とできてしまうところなんです。内藤さんがグラントワについてお話をされた言葉で印象に残っているのが、グラントワは

街と「オープン」な建物だ、ということです。例えば東京だと、1つ美術館や劇場ができたところで街が変わるようなことはないけど、益田とグラントワの関係は、片方がダメになったらもう片方もダメになるようなもので、街に占める重さが違う、ということでした。これは建物だけではなくて、中で行う活動、文化事業にもいえることなんです。自分が企画した展覧会やイベントに対してどんな人がどんな反応をしているか、大都会の美術館だと分かりにくいと思うのですが、益田ではそれが見えるし、何かする際にいろんな人を巻き込むこともできる。「顔の見えるおつきあい」が実感できるので、それがやりがいにつながっているという面があります。そういう意味でも、さっき内藤さんがおっしゃったように、これから面白くなっていく可能性がある気はします。

観客2 (女性)／私は広島から来たんですけど、益田に来るたびにグラントワを見ると、「あ、益田に来たな」と、石州瓦のイメージがすごくひもづいているので、なんかほっとするんですよ。ほっとするっていうか安心するっていうか、益田の地に足ついてるって感じがあります。今、東京をはじめとしていろんなところで再開発が進んでいるじゃないですか。広島の駅前もそうなんですけど、再開発するビルって大体ガラス張りで、鉄骨とアルミでみたいな、どこの街でも似たり寄ったりの建物のデザインになってしまっていて、まあシンプルでどこにでも合うからいいんでしょうけども、でも例えば、広島の駅前に今度、新しくきれいな建物ができると思うんですけど、出張とかから帰ってきて広島駅に降り立ったら、自分の地元に戻って来たなってホッとできる、グラントワを観て感じるような感覚は持てないんじゃないのかなと心配してるんですよ。そういった今の建築のトレンドと

うか流れ、再開発の建物に似たりよったりの近未来的なものが増えてきてる、ということに関して、皆さんどのようにお考えなのか、きいてみたいんです。

内藤／それに関してはですね、再開発の当事者が今日一人いますので(笑)あの、むしろ岩井さんに喋ってもらった方がいいかなと思うんですけど。[会場笑]

観客3(岩井)／まさか答える側に回るとは思いませんでした。以前、東急で内藤先生に大変お世話になって、渋谷の再開発を担当しておりました。ああいう特に大きい再開発は、お金の辻褃を考えないと実現できないんですね。副作用はいろいろあると思っていますけど、渋谷のような大都市のターミナルでは、ああいう答えが一番の現実的な解だったと思っています。内藤先生ちょっと、フォローをお願いします。[会場笑]

内藤／岩井さんは「渋谷ヒカリエ」を東急で担当された方です。でも不思議な人生を歩んでいて、その後、仙台空港の社長さんとして出たんですよ。仙台空港が被災後、大変だったのを立て直しされた方です。だから、いわゆる地方のことも分かっている。こういう人はあんまりいない。こういう人が東急の中で偉くなってくれるといいなと思っています。ちょっとフォローアップ、ね。[会場笑]

川西／内藤さんは徳山駅の駅ビルも設計されましたが、あれも再開発ですか？

内藤／再開発ですね。徳山(周南市)も戦争でひどい爆撃を受けたところなんですね。ほぼ広島並みですよ、原子爆弾は使われなかったけど。

戦後二番目か三番目の区画整理事業っていうのがあそこで行われて。前の駅ビルの利用のされ方がすごく良くて、コミュニティーセンターみたいになった。こんなの建て替えなくていいんじゃないかって僕は言ったんだけど、それを建て替えて、ああいう「駅ビル」っていう形でやりました。で、ともかく人が集まらないといけないし、昔は高校生があそこで勉強していたというので、できるだけそういう場所を作って欲しいと言われました。途中からTSUTAYAが入ることになったので、TSUTAYAの社長さんをお願いして、徳山バージョンを必ず作ってくれっていう話をして、今はすごく賑わっています。やっぱりその都度、どうやってそれが根付くかということを実験に考えてお願いをする、っていうことが大事な、と思います。

川西／建物を設計する人と、出資する人と、地域の自治体と、使う人たち、みんなで。

内藤／みんな一緒にならないとだめですね。県と市とそれから地域のNPOみたいなのと、全部。本当はその上に国がいるわけですけど、全部ラインナップが揃うとかなりのことができる。

さっき話した日向は、3人衆と呼ばれているものすごい熱血漢が県の職員の中において、それから市役所の中にも4、5人いて、地域のNPOにも4、5人、個人的な名前をいまだに挙げられるぐらいすごい熱心なやつがいて、これでラインナップが揃ったんですね。どれか一つかけてもだめなんですね。それが揃うと、かなりのことができます。だから味方をつけることですね。益田も味方ができるといいですね。グラントワみたいに県だけが頑張るっていうんじゃないで、県も市も、それから地域のNPOも、ってラインナップが揃うと、もっとパワフルに色々できるようになると思います。

観客4 (男性) / 私ごとなのですが、明日が誕生日なんですよ。今日この場で本当にエネルギーをもらえて、とてつもないプレプレゼントになりました。本当にありがとうございます。[一同拍手]

それで、質問といいますか、個人的な気持ちの持ち方みたいなことを皆さんにお聞きしたいなと思います。例えば、仕事していて「うまく行かないかもしれない」と思った時でも、自分のやりたいことを、軸をふらさずにまっすぐ突き抜けるのに、どういうことを考えて乗り越えてきたか、アドバイスのにいただけたらなと思います。私自身が今、会社員で、設計をやっているっていうこともありますし、地方も盛り上げて行きたいなという思いもあるので、3人の皆さんからひと言ずつでもいただきたいので、よろしくお願ひします。

洪 / さっき益田の人の気質をお伝えしましたけど、ちょっと能天気なところがあるんですよ、僕自身の中にも。ただ、益田工房っていうデザイン会社を作った時も、このマスコスホテルを建てた時もなんですけど、ある意味アンチで行きたいっていうのがあるというか、自分が思うデザインのありようとか今の社会に対して突きつきたい思いみたいなのがあって、それを絶対に貫くんだっていう前提が、まずあるんですよ。なので、何か障壁に当たった時に、そこに立ち返るっていうことを、まずします。それで、本当にこれで行けるかどうか考える。もちろん諸事情で自分を捻じ曲げなければいけない時もあるんですけど、でもそこを曲げずにやっちゃうんで、それで嫌われるっていう感じです。[会場笑]

内藤 / 嫌われてるの？

洪 / 島根県のデザイン業界では僕たち、かなり

尖ってるというか……

内藤 / 尖ってるよね。

洪 / なんか変な奴らだっというふうに思われています。

内藤 / 僕はですね、もう、うまくいかない事はたくさんあります。渋谷はもちろんですけども、なんか多摩美っていう大学の学長にもなっちゃうし。毎日うまく行かないことだらけなんですけど、お世辞じゃなくてね、この展覧会で益田に来る事が多いじゃないですか。マスコスのサウナですよ。[会場笑] あのサウナとね、それから水風呂、ここのはかなり良いですよ。

洪 / ありがとうございます。

内藤 / いや本当に、ストレス解消で東京でもサウナに時たま行っています。けどあんまりその時間もなくて。マスコスに来ると、あのサウナと水風呂が待っていると思うと、切り替えが効く。私の切り替えの一つ、大事なポイントになっています。[会場笑]

川西 / 私は展覧会とか、他にも色々とプロジェクトをやる時に、こんなことがしたいという最終目標はあるんですけど、その過程はどうあってもいいと思っています。関係者に嫌がられてもいいし、最初の計画とは違うやり方になっても、気にしないようにしています。洪さんとは逆で、一本ビシッと強い意思が通った人間ではないので……いいものができれば、紆余曲折で回り道があっても、最終形が当初の構想と違ってもいい、と思っています。

観客4 / ありがとうございます。

川西／洪さんから内藤さんに聞いてみたいことはありますか？

洪／じゃあひとつお願いを。僕はクリエイティブとは別に、事業をやっているの、経営者の立場で言わせていただくと、益田には大学がないので、20代の働き手のごっそりいないんですよ。20代の大学生って一番問題意識も高いだろうし、せっかくこんな美術館があるのにそういう人たちがいないというのが残念で、多摩美の学科を1つぐらいこっちに、サテライトをいかがですか？

内藤／これは私よりも、こちらにいらっしゃる理事長に……

川西／よろしいですか？ 元文化庁長官で、多摩美術大学の青柳理事長です。

青柳／県からの補助金、それから市からの補助金、それから市民の補助金を、多摩美がいただけるんだったら喜んでできます。[会場笑]

洪／今のお話は、益田市に共有していただきたいですね[会場笑]

内藤／美術館のことだけでなく、前に一度、益田高校でレクチャーをやらせてもらったことがあるんだけど、その後でみんなと話をしてみたら、やっぱり卒業したら益田を出ちゃうんだよね。みんな地元に残らないんだよね。だからうまく残れる仕組みができるといいなとは思っています。

川西／一度出てもいいけど、洪さんみたいに戻ってきてくれれば。

洪／いやいや、戻らないですよ。僕の同級生でも

優秀な人はもう羽ばたいちゃって、戻ってこないですよ、本当に。

内藤／じゃあ多摩美かどうかは分からないけど、大学のランチがどっかにあって。何かすごく進んでるところと益田とで、地続きなところを行ったり来たりするのは悪くないよね。

洪／いいと思いますね。

内藤／そういうのがあれば、いずれ都会に出たやつも戻ってくる機会ができるとか。

洪／先生、多摩美は避けようとしていますね、今？[会場笑]

内藤／ははは。

川西／大学とまでいなくても、今日みたいな場とか、内藤さんのようないろんな分野の方をお招きして若い人に参加してもらえる機会ができればと思うんですけど……なかなか若い人が美術館に来ないという問題があって。

洪／いないからじゃないですか？

川西／でも高校生はいますよね。洪さんは、高校時代に美術館がもしあったら、美術館に行こうって思いました？

洪／あったら来てたと思いますよ、もちろん。ただ、やっぱり大学がないことにはなかなか厳しいなと思ってます。隣の浜田市ってところには大学があるんですけど、飲食店でもアルバイトがすぐつかまるんですよ。

川西／それはありますね。美術館でもアルバイ

トとして学生さんに来て欲しい時もありますけど、浜田から益田までは来てもらえなくて。

洪／サテライトキャンパスでいいので、本当に欲しいですよ。

川西／色んな世代の人がうまく交流して、勉強だけじゃなくてアルバイトもしたり、そんな感じで、短期間でもここで生活をしてもらえるといいですね。益田って一度住んだら離れたくなくなるんですよ。私も移住組ですけど、あまり大阪に帰りたいたってなくて。

洪／それよく聞きますね、いろんな人から。

川西／そうそうそう、環境もいいし、静かで、食べ物も美味しいし。これを売りにして、ホテルだと数日しかしないですけど、もうちょっと長い期間滞在できるように仕組みがあるといいかと思えます。

洪／次は、こちらに高校生がいらっしゃるんで、どうですか？

川西／若い方のお話、うかがいたいです。今日このイベントにはなぜ来てみようと思ったんですか？

観客5 (女性)／洪さんからお誘いいただいて参加させていただきました。私は生まれた時にはもうグラントワがあって、小さい頃からピアノの発表会とか、合唱部とかの発表とかで行ってました。あと、祖父とよく美術館に行っていて、1つの企画展には2回行くぐらい、グラントワは本当に大好きで。学校の次に多く行くぐらいの場所です。

内藤／お～、すごいね、マスコスにも来たことがある？

観客5／はい。いずれ大学を目指すようになると都会に出ることになると思うんですけど、地元に戻ってきたらマスコスでお食事したいなと思ってます。

洪／ありがとうございます！

川西／周りのお友達にも同じぐらいグラントワに来てる人っていらっしゃる？

観客5／いえ、いないです。[会場笑] 祖父が美術がすごく好きで、歴史民俗資料館とか、雪舟記念館とか、そういうところが私の遊び場になって、グラントワもそういう場所の1つだったので。そういう恵まれた環境で、美術館に行く機会が私には沢山あったと思います。

内藤／将来は美術館系とか？アーティストになりたいとか？

観客5／そこまで考えたことはないんですけど……他の街に行ってもグラントワみたいな施設をあんまり見ることがないので、大学を目指すと益田は一度出ないといけないんですけど、帰ってきたいなと思います。

内藤・洪／素晴らしい！

川西／そろそろお時間になってきましたので、最後にひと言ずつお願いします。

洪／自分では、益田で内藤さんのような方と、お仕事ができたり、お話ができたりするような日がくるなんて、全く思っていなかったので……

内藤／大画面作ったりとか(笑)

洪／そうです、あんなのを作らせていただいたりとか。ひと言でいうと、帰ってきてよかったなと思ってます!ありがとうございます。[会場拍手]

内藤／僕が喋るよりも、青柳さんからひと言もらった方がいいと思うので、お願いします。

青柳／どうもありがとうございます。日本は今、ご存知の通り、政府に1,500兆円を超える借金があります。世界で一番、国として借金の多いところ。年間の予算が100兆円ぐらいで、その15倍だから、家庭になおすと、500万収入があるとしたら、7億円以上の借金があるというぐらい、とんでもない状態になってます。それから少子化で、どんどん人口が減ってます。それから、東京や大阪以外の地方が非常に厳しくなっている。だから今、日本で一番重要なのは、地域がどれだけ元気を出すか、そこに住んでいる方々が誇りを持って。ここは良い街だと思って住んでいただけるかなんです。

今日、グラントワを見せていただいて、3人のお話を聞いていて、少し可能性が出てきてるんじゃないかと思いました。10年ぐらい前に、秩父の高校で、社会の先生たちに講演をした時、最後に、校長先生をやめたばかりの方が、私達は一生懸命いい生徒を育てるために教育をやっているけど、優秀な生徒ほど東京へ出て行ってしまおう。例えば上の方から10人が全部出て行って、だけどそのうちの半分ぐらいは、実は秩父に帰ってきたいんだけど、都落ちというような烙印を押されるのが嫌なので、帰りたければとかなか帰ってこない、というんですね。それで、どうすればいいんでしょうかって聞かれて、それに対して何も返す言葉がありませんでした。

だけど今、洪さんがおっしゃってたように、少し尖ったお店やなんかで、昼も夜ももうちょっと活気づくとね、本当に良い街になるんじゃないか。それを心から願ってます。

それからやっぱり洪さんがおっしゃったように、建築というのは僕はつくづく、ある意味で暴力的なところがあるから、やっぱり控えめでなくちゃいけないと思ってます、いつも。それで内藤先生がすごいなと思うのは、そのことを一つ一つの作品でいつもきちんとふまえてくださるところです。例えば、その暴力的というので思い出すのが、大阪警察本部です。これはNHKや大阪城のすぐ横にあるんだけど、権威主義というか、俺は偉いんだっていう感じの建物なんです。警察は暴力を防ぐためのものなのに、自分たちが暴力をふるってるんです。[会場笑]それほどひどい。……というようなことが建築にはありうるのでね。そう考えるとこのグラントワは素晴らしいと思います。

今、思い出したのが、世界のワインコンクールで、1992年に初めてフランスワインが負けて、カルフォルニアのナパバリーのさるワインが優勝した時のことです。フランスの醸造家たちが、新酒なんかを飲んでも本当のワインの美味しさなんか分からない、だから10年後にまたやろうというんで、1992年にできあがったそのワインを10年寝かせておいて、ヴィンテージ10年ものとして2002年にまたコンクールやったんです。そうしたらフランスがまた負けて、ナパバレーが勝つんです。それでフランスの醸造家たちが言ったのが、「全然怖くない、我々の方には物語があるから」と。事実、ナパバレーが勝ったというのは世界中に広まりましたが、値段の高騰率は全然フランスが上なんです。[物語]なんです。だから例えばグラントワもね、8月の夏至の時の12時に瓦1枚がキラッと輝くのを見れば必ず結婚できるとか、そういう物語を作って、

ももっとも良さを広めて、それが結果として街おこしにつながると素晴らしいなと思いました。今日は本当にありがとうございました。[会場拍手]

内藤／みんなで物語を作りましょう。

川西／ありがとうございます。今日は色々な方が色々な場所から来ていただいて、本当に嬉しいです。美術館や劇場が街に対してできることは、展覧会をやるとかコンサートはもちろんなんですけれど、内藤さんのようなアーティストや専門家を呼んで、できれば地元の方と、お話するだけじゃなくて、今回の洪さんの例のようなコラボレーションをしていただける機会を設けることもあると思っています。そこからさらに将来に繋がる新しい可能性が生まれれば理想的ですね。それで今回、展覧会を機に内藤さんにお願いをして、こちらのマスコスホテル、それから1週間前には、先ほど洪さんの話にありました、Shimane Cinema Onozawaという映画館で、あえてグラントワの外で地域の方と一緒にイベントを開催することにしました。内藤さんにはお引き受けいただいて感謝しています。こういう形で、できるだけこの地に来たアーティストに街の中に入っていただいて、何かをする場を今後も設けられればいいなと思っています。その積み重ねで、地域で活躍する人が増えたり、今日のように広島や東京など色んなところから来て、イベントを目指してたまたま来てみたけど、益田って結構いいよねって思っリピーターになってくださるとか、そんなつながりを生んでいくのも文化施設の役割だと思っています。今日こちらにご参加の皆さんも、ぜひ今後も益田に通っていただければと思います。

内藤さん、洪さん、そして会場の皆さんも、今日は本当にありがとうございました。

註

- (1) 島根県芸術文化センター「グラントワ」を撮影した約10分の映像作品。建物の外壁を覆う石州瓦が天候や時刻によって様々な色に変化する様子や、中庭の水盤に映り込む光、建物の背後で刻々と遷り変わる空、ドローンによって上空からとらえたグラントワ全景など、建物の美しさを様々な角度から捉えた映像となった。内藤のディレクションにより、洪が撮影・編集を行った。
- (2) グラントワが開館15周年を迎えた2020年に制作した、グラントワの建築を紹介する動画。グラントワ職員からの質問に内藤が答える形式のインタビュー映像。内藤から職員への質問「グラントワを食べ物に例えると？」に答えるコーナーもある。全5回、各約10分の映像で、YouTubeにて公開中。[企画/島根県芸術文化センター「グラントワ」、撮影・編集/株式会社益田工房、音楽/相川暉、協力/内藤建築設計事務所]
- (3) JR益田駅からグラントワに至る都市計画道路中島染羽線(愛称「グラントワ通り」)は、平成29年に完成。広い歩道が設けられ、電線が地中化されるなど、以前に比べて歩きやすい道路となった。2020年2月に第27回「しまね景観賞」を受賞。
- (4) 島根県芸術文化センター(仮称)設計競技は、平成12年11月に参加7社を決定、平成13年3月に内藤建築設計事務所案を設計競技の最優秀作品に決定した。その後、設計に入り、平成14年11月に建設着工、平成17年3月に本体工事竣工。平成17年10月8日に開館をむかえた。
- (5) 内藤は日向市駅(2008年)、日向市庁舎(2019年)を設計し、街づくりの様々な活動にも関わっている。
- (6) 周南市立徳山駅前図書館(2018年)。
- (7) 内藤が中心的な役割を担っている、2005年から始まった渋谷駅周辺の再開発計画。
- (8) 照明や緞帳、パトンなどを収納するために舞台上部に設けられるタワー状の空間。
- (9) 「石西地区博物館等建設推進会議」(会員約200名)の代表20名が1991年9月17日、益田市に研究機能を備えた県立の美術館か博物館を設置してほしいと澄田知事に要請した。(1991年9月18日「山陰中央新報」参照)
- (10) 2008年に営業終了した映画館を、クラウドファンディングなども活用して復活させ、2022年1月に開業した劇場。映画上映のほか、様々なイベントを地域の人々と交流しながら実施している。企画展「建築家・内藤廣」関連プログラムとして11月5日に「映画『ハーモニー』上映&スペシャルトーク『未来の都市をどう描く? 建築×アニメ』を開催した。[トーク登壇者/内藤廣、湯浅良介(建築家・元内藤建築設計事務所員)、田中栄子(STUDIO4°Cプロデューサー)]
映画「ハーモニー」はSTUDIO4°C制作のアニメーション映画で、劇中の建造物や乗り物のアイデアスケッチを内藤が提供し、湯浅はスタッフとして参加した。企画展「建築家・内藤廣」では「Unbuilt」(実際には建っていないもの)として展示された。

Bulletin of
Iwami Art Museum
No.18, 2024

島根県立石見美術館 研究紀要 第18号

2024

Bulletin of
Iwami Art Museum
No. 18, 2024

島根県立石見美術館 研究紀要 第18号

2024